

共同研究

『『近代』における『制度的知』と『異端』の対面』

最終活動報告

金 基淑

本共同研究は2007年3月をもって、予定された3年間の研究期間を終えることとなった。2004年に文化人類学科と現代社会学科の8人の教員(2年目に外部から二人が参加)で始まったこの共同研究会は、人数が少ないということもあって、研究会の開催数はそれほど多くはなかった。しかし、それぞれの研究発表の内容は「近代化」がもたらした諸側面を歴史的に概観するとともに、多面的に考察したものとなっている。さらに、研究会でのディスカッションを通じて、文化人類学的視点と法学・経済学的視点の相違や相互補完的な部分について議論できたことはまさに共同研究ならではの利点といえる。そうした議論や研究発表をさらに発展させ、プロジェクトの成果を、最終年度に出版物として出すことができなかった点は課題として残るが、下記のように、メンバーによる三つの個別論文が『人間学研究第7号』に掲載されたことで、3年間に及んだ共同研究の締めくくりとしたい。

第一回研究会

- ・ 演題:「商品としての『乞食』—近現代における乞食という存在の変容」
- ・ 発表者:安田ひろみ(文化人類学科助教授)
- ・ 日時:2007年3月14日(水)15:00-17:30
- ・ 場所:本学F232

研究成果

- ・ 金 基淑(文化人類学科教授)、『インド・ベンガル地方におけるキリスト教ミッションとメディア—19世紀のシランプル(Serampore)・ミッションを中心に』、本誌
- ・ 鈴木 七美(文化人類学科教授)、『デンマークの福祉における余暇の思想—フォルケホイスコーレと生活指導教員養成大学の活動をとおして』、本誌
- ・ 樺 博行(現代社会学科教授)、『クラスアクション公正法(Class Action Fairness Act)の成立と大規模不法行為訴訟への影響』、本誌